

読み聞かせを支える絵本のことばの質の検討^{※1}河村 あゆみ^{※2}・馬場 美友^{※3}

特別支援学校では本の読み聞かせ活動が積極的に行われており、絵本の読み聞かせによる言葉の発達などの教育的効果が多く報告されている。しかし、特別支援学校における図書の蔵書冊数は小学校、中学校と比較して大変少なく、蔵書冊数の不足の改善が課題となっている。また、読み聞かせ活動の教育効果を高めるためには、蔵書量だけでなく質の確保も重要な課題である。本研究では絵本のことばの中でもオノマトベに着目して絵本の質について検討を行った。絵本は長く読み継がれてきた99冊を対象とした。結果、CDS (child-directed speech) と同様に、絵本の対象年齢カテゴリーに応じたオノマトベの量的質的变化がみられ、長く読み継がれてきた絵本のことばは、対象年齢児の言語発達水準に適切であることが分かった。このことから、子どもの興味を引き出すためには新しい多様な絵本も必要であるが、絵本の読み聞かせの質を支えるためには、長く読み継がれてきた絵本を中核とする蔵書が望ましいと考えられた。

キーワード：特別支援学校、長く読み継がれている絵本、オノマトベ、CDS

I はじめに

1. 絵本と特別支援教育

子どもの障害の有無に関わらず、本の読み聞かせは様々な教育的効果をもたらすという報告がなされている(芦田・松島, 2014)。バトラー(2006)は、重い障害をもって生まれたクシュラが両親から毎日絵本を読み聞かせてもらった結果、言語・認知能力が著しく発達し、3歳の頃には定型発達児とほぼ同じ水準の知能レベルに達していたと記している。また、特別支援学校、小中学校の特別支援学級、就学前の障害児保育などの障害児教育の場においても、絵本の読み聞かせによって言葉の発達や情緒の安定などの教育的効果がみられた実践例が数多く報告されてきている(芦田・松島, 2014)。文部科学省(2020)によると、特別支援学校小学部では88.7%、中学部は71.1%が本の読み聞かせを行っており、積極的に読み聞かせが実施されている。

このように本の読み聞かせの教育的効果が報告

され、特別支援学校において盛んに読み聞かせが行われているにも関わらず、特別支援学校における図書の状況から次の2つの課題があげられる。

一つは、特別支援学校の学校図書館の蔵書冊数の少なさである。2020年度に文部科学省の「学校図書館図書標準」を達成している特別支援学校小学部の割合は15.5%であり、小学校の71.2%が達成していることに比べてかなり低くなっている。中学部は3.6%とさらに少なく、中学校の61.1%と比較して大変低い達成率となっている(文部科学省, 2020)。二つ目は、蔵書される図書の質の確保である。多数の図書を備えることも重要であるが、教育的効果を高めるためには本の質にも配慮し、子どもの発達にふさわしい本が選択される必要がある。特別支援学校において蔵書冊数の不足を改善すると共に、良質の絵本を備えることによって、効果的な読み聞かせ活動の環境を整える必要がある。

松中・田中(2011)による特別支援学校教員を対象とした絵本の教育的効果のアンケート調査結果では、小学部において「ことばの学習」に最も多く絵本が使用されていることが明らかとなっている。また、芦田・松島(2014)による知的障害

※1 Examining the quality of words in picture books that support storytelling

※2 広島国際大学

※3 広島シーサイド病院

特別支援学校小学部の教員に対するアンケート調査では、絵本の読み聞かせは「終わりの会」について「ことば・かず」の「授業の中」で行われることが多かった。これらの結果から、特別支援学校小学部においては、絵本は「ことば」に関する学習場面で活用されることが多く、質の良い絵本を選択するためには、絵本の「ことば」に注目する必要があるだろう。

2. 絵本のことばとCDS (child-directed speech)

絵本の「ことば」とは、そもそもどのような性質を持つのであろうか。松居 (2007) は福音館書店の月刊絵本『こどものとも』の編集長として児童文学界に大きな影響を与え続けてきたが、絵本や子どもの本との深い関わりを通じて、本は「文字の文化」を象徴するものであるが、絵本は本質的に「声の文化」に含まれるとしている。絵本が「声の文化」に属する理由として、文と絵で構成されている絵本の物語世界のイメージを膨らませるためには、「文のことば」と「絵のことば」の両方を全く同時に体験する必要があり、「文のことば」を「声のことば」で聴く、つまり読み聴かせてもらう必要があるからと述べている。また、児童文学作家の松岡 (2015) は、文字をたどって読んでいる子に比べて、読み聞かせに聞き入っている子どもは、物語世界へ入り込む深さが全く異なっていると述べており、読み聞かせが物語体験に重要な役割を担っていることを示している。このように、絵本は読み聞かせを前提として作られているものといえるであろう。このことから、絵本のことばには、大人から子どもへ語りかけるときの発話特徴が反映されていると考えられ、特に、乳幼児を対象とした絵本の文には、CDS (child-directed speech) の特徴が現れると予測される。CDSとは子どもに対して行われる養育者の語りかけであるが、子どもの年齢に応じて敏感に語りかけを調整する特徴を持っている。その特徴として、子どもの年齢が低いほど抑揚を大きくとる、ピッチをあげるなどの韻律的特徴が言語普遍的にあげられるが、日本語を母語とする養育者においてはオノマトペを多用することがあげられる (佐治・今井, 2013; 佐治, 2014)。

3. 絵本のことばとオノマトペ

オノマトペは、養育者と子どもとのコミュニケーションにおいて非常に頻繁に現れ (佐治, 2014)、絵本においても、『ごぶごぶごぼごぼ』 (駒形, 1999) のようにオノマトペだけで構成される絵本もあるなど、実際に多く用いられている (深田, 2013)。このことから、オノマトペは絵本のことばに現れるCDSの特徴といえるであろう。CDSにオノマトペが多く見られる理由として、オノマトペが音象徴性をもつことがあげられる。音象徴とは、ある言語音と参照対象とが有縁的な関係をもつ現象を指しており、言語音と参照対象が類似的・有縁的な関係をもつ性質を「類像性」と呼ぶ (佐治・今井, 2013)。高い類像性を持つ音象徴語であるオノマトペは、特定の言語的知識に依存しないため、ことばを学び始めた子ども達に理解しやすいことばであり、子どもの年齢に応じた語りかけを敏感に調整する養育者は、語りかけの中にオノマトペを頻繁に用いている (佐治・今井, 2013)。また、養育者は子どもに対して単に高頻度にオノマトペを用いるだけではなく、現実の音や動作に対応した高い類像性を持ったオノマトペを使うことからはじめ、次第に、文の中に統語的に組み込み、言語の慣習に則した使い方へと移行させていくことが分かっている (佐治, 2014)。

II 目的と方法

1. 目的

本研究では、絵本のことばにCDSの特徴が現れていると考えられることから、絵本に現れることばの質を検討するためにオノマトペに着目することとした。CDSにみられるように子どもの年齢に応じたオノマトペの使用変化がみられれば、その対象年齢の言語発達水準にある子どもにとって適切なレベルのことばであるといえるからである。そこで、オノマトペについて次の点について検討を行った。

1) オノマトペの出現率の変化について

絵本においても、オノマトペが対象年齢の言語発達に合わせた足がかりとして用いられていけば、言語発達に応じてその足場は段階的に外されていく、つまり、オノマトペの出現率は対象年齢

が高くなると共に減少すると考えられたため、年齢カテゴリー別にオノマトペの出現率について検討することとした。

2) オノマトペの類別出現率の変化について

CDSにおいて類像性の高いオノマトペ（擬音語）から使い始めるように、対象年齢が低い絵本では擬音語の出現率がより多く、対象年齢が高くなるにつれ類像性が低くなる擬態語の出現率が多くなると考えられた。そのため、年齢カテゴリー別にオノマトペの類別出現率の変化について検討した。

3) オノマトペの統語的役割の変化について

CDSにみられるように、絵本の対象年齢に応じてオノマトペの統語的役割にも変化がみられるかについて、年齢カテゴリー別に検討を行った。

2. 対象

知的障害特別支援学校小学部において使用される絵本が乳幼児～低学年向けのものがほとんどであることから（芦田・松島，2014）、乳幼児を対象とする絵本とし、広島市子ども図書館が作成した冊子『おひざにだっこのえほん』『どの本よもうかな』（広島市子ども図書館，2020）で紹介されている絵本とした。これらの冊子では、子ども達に長く読み継がれている絵本が選ばれている。また、年齢カテゴリー別に0・1・2歳（29冊とシリーズ絵本）、3・4歳（33冊）、5・6歳（33冊）が、推薦絵本として紹介されており、3・4歳、5・6歳では、全てを対象とした。0・1・2歳は推薦されている29冊の絵本から、わらべうた遊びを紹介した1冊を除き、28冊を対象とした。加えて、他の年齢カテゴリーの絵本数と同数にするため、0・1・2歳向けの絵本5冊を、重版を重ねている絵本の中から、無作為に選択し計33冊とした。よって、全年齢カテゴリーで99冊の絵本を対象とした（Table 1）。

3. 方法

1) 絵本の語の合計数の算出

0・1・2歳、3・4歳、5・6歳のカテゴリーごとの絵本の語の合計数（助詞、助動詞を除く）を、テキスト型データを分析するフリーソフト

ウェアKH Coder（樋口，2014）によって算出した。

2) オノマトペの抽出

小野（2007）によると、オノマトペは擬音語（擬声語）・擬態語などの総称であり、オノマトペとなる言葉は、次の3つの基準（特性）を持つものである。第一の基準は、人間の発声器官以外から出た音を表した言葉（例：鐘の音「ゴーン」）、第二は、人間の発声器官から出した音声で、ひとつひとつの音に分解できない音を表した言葉（例：泣き声「ワーン」）、第三は、音のないもの、また聞こえないものに対して、その状況にある音そのものが持つ感覚で表現した言葉（例：ものが光さま「きらっ」）である。

この基準に当てはまるオノマトペを収集した『日本語オノマトペ辞典』（小野，2007）を用いて、絵本に出てきている語がオノマトペかどうか判別し、さらに類別も行った。同辞典を参考に作成したオノマトペ類別項目をTable 2に示す。さらに、小野（2019）が「こつさえ知れば、オノマトペはいくらでも創れる」と述べているように、オノマトペの中核に、オノマトペらしい成分をつけることで、次々と創作できる側面が、オノマトペの特性としてあげられる。オノマトペらしい成分とは、オノマトペに付く「り」「っ」「ん」「ー」、同じ形を繰り返す性質（例：ぐんぐん）を指している。例えば、絵で場面や状況を説明する漫画においては、オノマトペが豊富に使用されているが、「シュポッ」「しゅらんっ」のように独創的なオノマトペがみられている（小野，2019）。そのため、『日本語オノマトペ辞典』（小野，2007）に語としての記載がなくても、オノマトペの基準にあてはまる語については、オノマトペと判断した。

3) オノマトペの統語的分類

佐治・今井（2013）は、CDSと大人が大人に対して語りかけるADS（adult-directed speech）において産出されたオノマトペの統語的特性について比較検討したところ、間投詞的な使い方と副詞的な使い方に大きく分けられた。さらに、間投詞的なオノマトペは「ぐるぐる」のように完全にオノマトペ単体で使われるものと、「ぐるぐる」とのように助詞を伴うものの2つに分けられた。副

Table 1 年齢カテゴリー別・オノマトペを抽出した絵本

| | 0・1・2歳 | 3・4歳 | 5・6歳 |
|----|--------------|---------------|-----------------|
| 1 | いないいないばあ | あかくんときいろちゃん | いたずらきかんしゃちゅうちゅう |
| 2 | ごぶごぶごぼごぼ | アンガスとあひる | おおかみと七ひきのこやぎ |
| 3 | じゃあじゃあびりびり | いたずらねこ | おいしいのぼうけん |
| 4 | おとうさんあそぼう | おおきなかぶ | かいじゅうたちのいるところ |
| 5 | くっついた | おだんこぼん | かもさんおとおり |
| 6 | ママだいすき | おやすみなさいコッコさん | からすのパンやさん |
| 7 | おさんぽおさんぽ | かしこいビル | ガンピーさんのふなあそび |
| 8 | おふるでちゃぶちゃぶ | かばさん | きつねのホイティ |
| 9 | おやすみ | くまのコールテンくん | くいしんぼうのはなこさん |
| 10 | きゅっきゅっきゅっ | ぐりとぐら | くんちゃんのはじめてのがっこう |
| 11 | しっこっこ | ぐるんぱのようちえん | げんきなマドレーヌ |
| 12 | パンツのはきかた | ごろごろにゃーん | こねこのびっち |
| 13 | くだもの | 三びきのこぶた | しずくのぼうけん |
| 14 | にんじん | 三びきのやぎのがらがらどん | 11びきのねこ |
| 15 | まるくておいしいよ | しょうぼうじどうしゃじぶた | しろいうさぎとくろいうさぎ |
| 16 | いぬがいっぱい | せんたくかあちゃん | すてきな三にんぐみ |
| 17 | こんにちはどうぶつたち | ぞうくんのさんぽ | だいくとおにろく |
| 18 | どうぶつのおかあさん | だるまちゃんとてんぐちゃん | だごだごころころ |
| 19 | がたんごとんがたんごとん | タンタンのぼうし | たろうのおでかけ |
| 20 | でんしゃ | ちいさなねこ | どろんこハリー |
| 21 | ぶーぶーじどうしゃ | ちいさなヒッポ | 二ひきのこぐま |
| 22 | かおかおどんなかお | ちびゴリラのちびちび | はじめてのおつかい |
| 23 | でてこいでてこい | ティッチ | はははのはなし |
| 24 | もこもこもこ | てぶくる | ひとまねこぎるときいろいぼうし |
| 25 | がちゃがちゃどんどん | どろだんご | 100まんびきのねこ |
| 26 | かっきくけっこ | はなをくんくん | ふゆめがっしょうだん |
| 27 | ととけっこうよがあげた | はらぺこあおむし | ペレのあたらしいふく |
| 28 | びよびよびよ | ぶたぶたくんのおかいもの | まっくろネリノ |
| 29 | おーくんおんぶ | ぼくにげちゃうよ | めっきらもっきらどおんどん |
| 30 | てんてんてん | みんなうんち | ももたろう |
| 31 | あーんあん | もりのなか | モーモーまきばのおきやくさん |
| 32 | ちびすけどっこい | ロージーのおさんぽ | ゆきのひ |
| 33 | くつくつあるけ | わたしのワンピース | ラチとらいおん |

Table 2 オノマトペ類別項目

| | |
|--------------------|-----------------------------------|
| 擬音語 | 擬音語として用いられるもの |
| | 擬音語のうち、人間や動物など、主として生命体の出す音声 |
| 擬態語 | 擬態語として用いられるもの。品詞に関係なく広く様態を表す語を含める |
| 擬態語・擬音語の両方の用法があるもの | |
| 名詞 | 特に、名詞として用いられる性格のもの。 |

詞的な用法は、「ぐるぐるまわってるね」のように一般動詞を修飾する副詞的なものと、「ぐるぐるする」のように軽動詞「する」と結びついた動作名詞的な役割を担っているものが見られた。また、数は少ないが、これら4種以外の用法がみられた。

そこで本研究では、佐治・今井（2013）に倣い、絵本に出現したオノマトペを間投詞的な使い方2種と、副詞的な使い方の2種に、その他の用法を加えた5種に分類し検討を行った。

Ⅲ 結果

1. 絵本の合計語数・抽出されたオノマトペの語数

年齢カテゴリーごとの絵本の合計語数と抽出されたオノマトペの語数、また、抽出されたオノマトペについてはオノマトペ類別項目（Table 2）それぞれの合計数についてTable 3に示した。

2. オノマトペの出現率変化（Fig.1）

年齢カテゴリーが上がるにつれ絵本全体の語数は増加したが、オノマトペ出現率は「0・1・2歳」では17.4%、「3・4歳」では6.2%、「5・6歳」では3.7%と減少した。

3. オノマトペの類別変化（Fig.2）

擬音語の出現率は、「0・1・2歳」では47%、「3・4歳」では35%、「5・6歳」では23%と、年齢が高くなるにつれ減少した。一方、擬態語の出現率は、「0・1・2歳」では23%、「3・4歳」では43%、「5・6歳」では54%と、年齢が高くなるにつれ増加した。また、擬音語・擬態語の両方の用法をもつ語は、「0・1・2歳」では30%、「3・4歳」では22%、「5・6歳」では23%と、どの年齢においてもほぼ同程度の出現率であった。名詞は「0・1・2歳」に1語出現したのみで、どの年齢カテゴリーにおいても出現率は0%であった。

Table 3 年齢カテゴリー別・絵本の合計語数・抽出されたオノマトペの語数

| | 0・1・2歳 | 3・4歳 | 5・6歳 |
|----------------------|--------|------|-------|
| 語の合計数 (助詞、助動詞を除く) | 1696 | 8270 | 16546 |
| オノマトペの合計数 | 297 | 512 | 604 |
| 擬音語 | 140 | 177 | 328 |
| 擬態語 | 68 | 222 | 135 |
| 擬音語と擬態語の両方 | 88 | 113 | 141 |
| 名詞 | 1 | 0 | 0 |

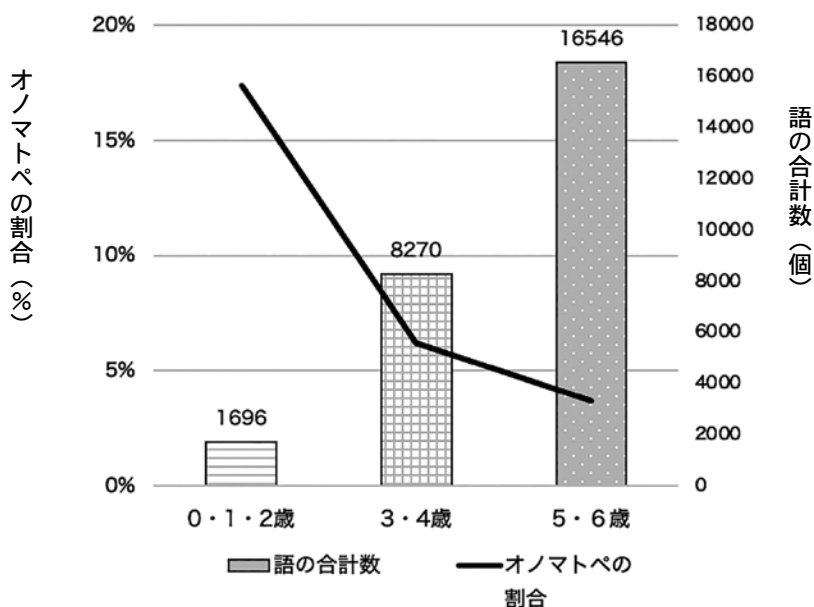


Fig. 1 オノマトペの出現率変化

4. オノマトペの統語的役割の変化について (Fig. 3)

間投詞的オノマトペ (オノマトペ単体) は、「0・1・2歳」で90%以上の出現率であったが、「3・4歳」では54%、「5・6歳」では41%と、年齢が高くなるにしたがい減少した。一方、間投詞的オノマトペ (助詞を伴う) は、「0・1・2歳」はわずか3%であったが、「3・4歳」では25%、「5・6歳」では28%に増加した。

副詞的オノマトペ (一般動詞修飾) は「0・1・2歳」は1%であったが、「3・4歳」では16%、「5・6歳」では24%に増加した。副詞的オノマトペ (する動詞と結合) は、「0・1・2歳」は0%であったが、「3・4歳」では3%、「5・6歳」では6%とわずかに増加した。その他の用法については、全年齢においてほとんど出現しなかった。

以上のように、どの年齢においても、オノマトペ単体で間投詞的に使われることが最も多く、中でも「0・1・2歳」では、ほぼ全てのオノマトペが単体で用いられていた。しかし、年齢が高くなるにつれ、助詞を伴って用いられる割合も増えていき、同時に、一般動詞を修飾する副詞的な使

われ方をするオノマトペが増加した。

IV 考察

1. 絵本に出現したオノマトペの量的変化について

絵本の対象年齢カテゴリーが高くなるとともに、オノマトペの出現率は減少した。0・1・2歳では全体の語数に対して約20%がオノマトペであったが、5・6歳では約4%まで減少し、5分の1となっている。このように、CDSと同様に、絵本に出現するオノマトペにおいても対象年齢が高くなるほど、類像性をもつオノマトペから通常語彙への移行がみられたといえる。

2. 絵本に出現したオノマトペの質的变化について

佐治・今井 (2013) による、3歳児、5歳児を対象に擬音語と擬態語 (疑情語) の新奇動詞の理解の調査において、擬音語は3歳から意味を推測でき5歳まで理解の程度に変化はなかったが、擬態語 (疑情語) は5歳の方が正答率が向上したことを報告している。本研究においても、擬音語が低年齢カテゴリーで多く出現し、5・6歳の高年

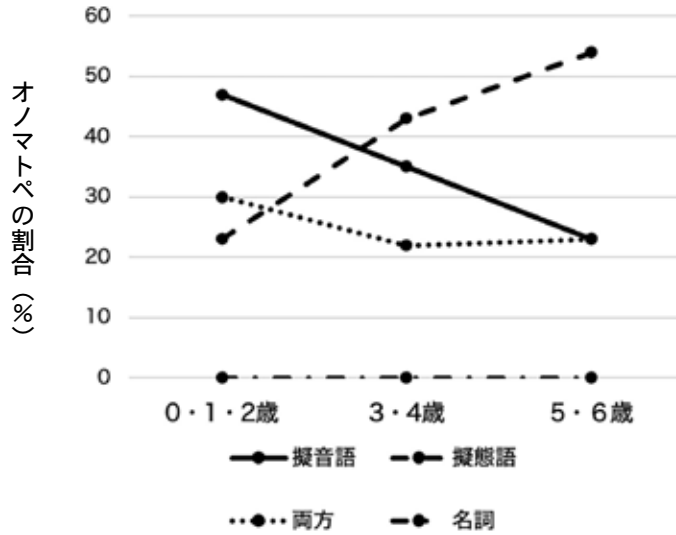


Fig. 2 オノマトペの類別変化

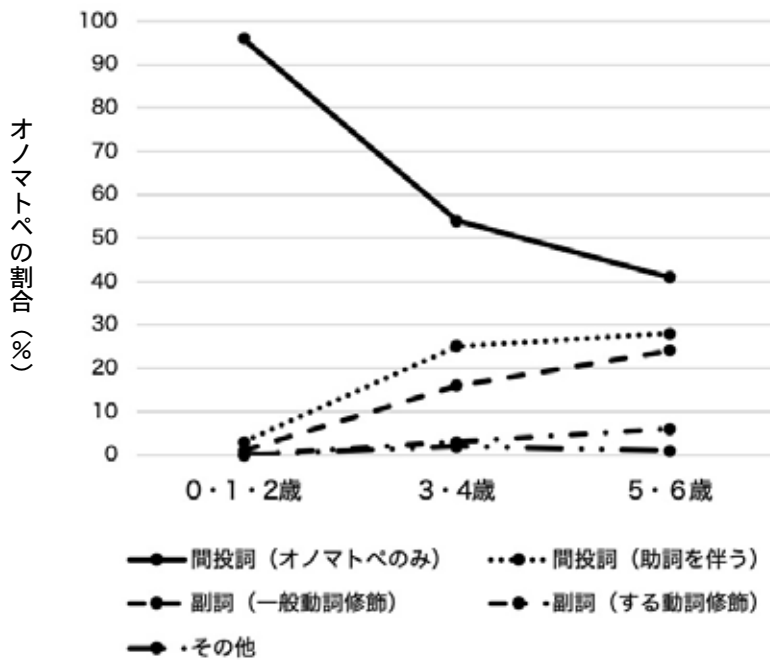


Fig. 3 オノマトペの統語的役割の変化

年齢カテゴリーで擬態語がオノマトペの半数以上を占めるようになっていた。このことから、CDSと同様に絵本におけるオノマトペも、その類像性の高さを子どもの年齢に合わせて調整しているといえる。

次にオノマトペの統語的変化であるが、0・1・2歳ではオノマトペ単体の間投詞の用法が大部分を占め、年齢と共に減少したものの、どのカテゴリーにおいても最もよく出現していた。これは、佐治・今井(2013)の研究でCDSにみられ

るオノマトペの多くが、間投詞的用法であったことと一致していた。しかし同時に、対象年齢カテゴリーが高くなるにつれ、助詞を伴う間投詞用法、一般動詞を修飾する副詞的用法が増加していた。佐治・今井（2013）によると、ADSのオノマトペは副詞として動詞と共に現れることから、絵本においても対象年齢が高くなるにつれ、オノマトペを統語的に組み込む傾向が現れ、オノマトペの副詞的用法が増加していったと考えられる。

3. まとめ

今回対象とした絵本に出現したオノマトペは量的・質的变化とともに、CDSにみられるオノマトペの使用変化の傾向と一致した。このことから、絵本の対象年齢の言語発達水準にある子どもにとって適切なレベルのオノマトペが使用されているといえるであろう。ただし、本研究で対象とした絵本は、子ども達に長く読み継がれてきたものであることに注意が必要であろう。長く読み継がれてきた絵本とは、その絵本の主題が、子どもに伝わるように、目に見えるようなことばの組み立て方で語られ、そのことばを受けた絵との両方が質的に一致して語られており、違和感なく絵本の物語世界に入っていけるものを指していると考えられる（松居，1981；松居，2007）。ここで述べられている子どもに伝わるような語りかけとは、上手く調整されたCDSの特徴をもっていることばであろう。一方、重版されなかった絵本や出版されて間もない絵本において、長く読み継がれてきた絵本と同様に、適切なCDSの特徴が絵本のことばに現れているかどうかは不明であり、これについては今後検討が必要である。

以上のことから、長く読み継がれてきた絵本、そこで語られていることばが、対象年齢児の言語発達水準に適切である質の良い絵本といえるであろう。このことから、特別支援学校の絵本の蔵書を選定する対象を、長く読み継がれてきた絵本にすることで、言語発達水準に応じた良質な絵本を確保することが出来るのではないだろうか。長く読み継がれてきた絵本の明確な定義はないが、松岡（2017）は、すぐれた絵本であるかどうか見極める一つの基準として、25年以上前に出版され重版を重ねていることをあげている。また、松岡亭子が名誉理事長を務める私立東京子ども図

書館において半世紀以上に渡り、子ども達と親しんできた絵本の中から1157冊を厳選して紹介しているブックリスト『絵本の庭へ』（東京子ども図書館，2012）や、翻訳家の協明子らによる『子どもの育ちを支える絵本』（協，2011）にはこの条件に該当する絵本をはじめとして、多くの良質な絵本が紹介されており、蔵書選定の参考になるであろう。

一方で、知的障害特別支援学校小学部の教員が読み聞かせの絵本を選ぶ際に重視していることとして「児童の興味を引く題材」と回答しているように（芦田・松島，2014）、子どもの様々な興味を捉えられるように、新しく多様な絵本を備えておくことも必要であろう。しかしながら、特別支援学校の読み聞かせ活動の質を支えるためには、長く読み継がれてきた絵本を中核として蔵書が選定されることが望ましい。

付記

本研究は、2019年度広島国際大学言語聴覚療法学専攻卒業論文（研究責任者；河村あゆみ、研究分担者；馬場美友）として学内発表した内容を大幅に加筆・修正した。

文献

- 1) 芦田朗子・松島明日香（2014）：特別支援学校における絵本の読み聞かせに関する実態調査. 奈良教育大学紀要, 63（1）, 77-86.
- 2) ドロシー・バトラー（2006）：クシュラの奇跡 140冊の絵本との日々. のら書店.
- 3) 深田智（2013）：第11章絵本の中のオノマトペ. オノマトペの射程 近づく音と意味. 篠原和子・宇野良子（編）. ひつじ書房, 183-199.
- 4) 樋口耕一（2014）：社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して. 第1版, ナカニシヤ出版.
- 5) 広島市子ども図書館（編）（2020）：おひぎにだっこのえほん. 広島市子ども図書館.
- 6) 広島市子ども図書館（編）（2020）：どの本よもうかな. 広島市子ども図書館.
- 7) 駒形克己（1999）：ごぶごぶごぼごぼ. 福音館書店.

- 8) 松居直 (1981) : わたしの絵本論. 国土社.
- 9) 松居直 (2007) : 声の文化と子どもの本. 日本キリスト教団出版局.
- 10) 松岡享子 (2015) : 子どもと本. 岩波新書.
- 11) 松岡享子 (2017) : えほんのせかい こどものせかい. 文春文庫.
- 12) 松中修子・田中道治 (2011) : 絵本活用に関する特別支援学校教師の意識. 京都教育大学特別支援教育臨床実践センター年報, 1, 51-60.
- 13) 文部科学省児童生徒課 (2020) : 令和2年度「学校図書館の現状に関する調査」結果について.
- 14) 小野正弘 (2007) : 擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典. 小学館.
- 15) 小野正弘 (2019) : オノマトペ 擬音語・擬態語の世界. 角川ソフィア文庫.
- 16) 佐治伸郎・今井むつみ (2013) : 第9章語彙習得における類像性の効果の検討. オノマトペの射程 近づく音と意味. 篠原和子・宇野良子 (編). ひつじ書房, 151-166.
- 17) 佐治伸郎 (2014) : 第5章記号の意味を共につくる. ことばと身体性. 今井むつみ・佐治伸郎 (編). 岩波書店, 123-149.
- 18) 東京子ども図書館 (編) (2012) : 絵本の庭へ (児童図書館 基本蔵書目録1). 東京子ども図書館.
- 19) 協明子 (編) (2011) : 子どもの育ちを支える絵本. 岩波書店.

